

第1回

オルガン演奏会




平成17年6月22日(水)

開場 18 : 30

開演 18 : 45

場所 900番講堂

主催 東京大学 オルガン同好会



～ Prologue ～

本日はお忙しい中、オルガン同好会の第 1 回演奏会にお集まりいただき、まことにありがとうございます。

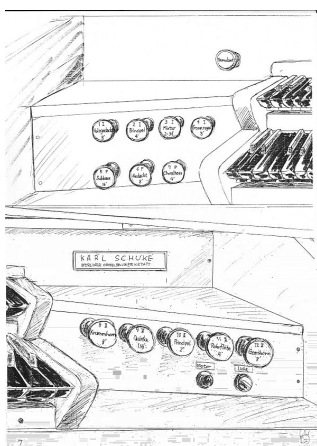
私たちオルガン同好会は、昨年に発足して早くも一年余りになります。最初は全く一からのスタートであり、果たして活動して行けるのか非常に不安でしたが、多くの方の御厚意と御支援により、特にオルガン委員会の先生方には格別のお計らいを賜り、今まで活動を継続することができました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

今回の演奏会の演奏時間はおよそ一時間となります。内容もオルガン曲だけにとどまらず、ピアノ曲が元になっているものも多くあります。しかし、ストップ（注）を自分なりに試行錯誤して選んで演奏される曲は、ピアノでは表現しきれない曲の魅力を引き出してくれることでしょう。時代もパッヘルベルからドビュッシーまでと幅広く、オルガンの可能性を広げます。

かしこまったり緊張したりせず、どうか気軽にリラックスして演奏をお聴き下さい。まだまだ力不足の我々の演奏ではありますが、皆様に 900 番のオルガンの魅力を少しでも感じて頂ければ幸いです。

では、どうぞごゆっくりお楽しみ下さい。

オルガン同好会 一同



注) ストップ

パイプオルガンは多彩な音色を出す事ができますが、演奏に使われない音色のパイプは風を送りこまないようにすることができます。その調整をするのが左図のストップです。

900 番のオルガンは 12 のストップを持ちます。これらの組み合わせによって、様々な音色を表現することが可能となります。

～ Program ～

Opening The Phantom of the Opera

マルティン＝ルター / ヨハン＝パッヘルベル

Martin Luther(1483 - 1501) / Johann Pachelbel(1653 – 1706):

「神はわがやぐら」

“Ein feste Burg ist unser Gott”

Organ: 鹿島 真人 Masato Kashima

モデスト・ムソルグスキー：展覧会の絵 より

Modest Moussorgsky(1839 - 1881): Pictures at an Exhibition

. プロムナード Promenade

. 小さなひよこの踊り Ballet des poussins dans leurs
coques

. プロムナード Promenade

Organ: 柴田 康太郎 Koutaro Shibata

J.S. バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

. 「クラヴィーア練習曲集第3巻」より

「われらの主キリスト、ヨルダンに来たり」

“Christ, unser Herr, zum Jordan kam“ BWV684,

aus: “Dritter Teil der Klavierübung”

. 「8つの小プレリュードとフーガ」より

プレリュードとフーガ イ短調

Präludien und Fugen a-moll BWV559,

aus: “Acht kleinen Präludien und Fugen”

Organ: 平澤 歩 Ayumu Hirasawa

クロード・ドビュッシー : 子供の領分 より

Claude Debussy (1862 - 1918): Children's Corner

・ 第2曲 象の子守歌

Jimbo's Lullaby(Assez modere)

・ 第1曲 グラドゥス・アド・パルナッスム博士

Doctor Gradus ad Parnassum (Moderement anime)

Organ: 柴田 康太郎 Koutaro Shibata

J.S. バッハ

Johann Sebastian Bach(1685 – 1750):

ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調

Konzert für Violine Nr.1 a-moll BWV1041

Organ: 平澤 歩 Ayumu Hirasawa

Violin: 江間 有沙 Arisa Ema

J.G. ヴァルター

Johann Gottfreid Walter (1684 – 1748):

「イエスはわがよろこび」の主題による変奏曲

“ Jesu meine Freude ”

Organ: 鹿島 真人 Masato Kashima

Closing Pachelbel's Canon

～ Program Notes ～

マルティン＝ルター / ヨハン＝パッヘルベル：「神は我がやぐら」

主題は「神はわがやぐら」というドイツの有名な賛美歌で、あの宗教革命の指導者であるマルティン＝ルターが作詞・作曲したものである。題からもわかるとおり、神の櫓＝「教会」というものをテーマにしている歌で、ルターの宗教改革はこの賛美歌を宗教改革の象徴的な歌としてダイナミックに動いていった。今回はその原曲の和声と、その主題によるフーガ風の変奏曲を併せて弾きたいと思う。“カノン”で有名なパッヘルベルによる変奏である。

(文責 鹿島)

モデスト・ムソルグスキー：展覧会の絵より

親友の画家ハルトマンの遺作展覧会においてインスピレーションを得て書かれた。ムソルグスキーは何だかアル中だということも有名で、「ムソルグスキー アル中」で検索すると Google で 65 件のヒットがある。この曲自体はラヴェルがオーケストラ用に編曲したものの方が有名かもしれないが、実際はピアノ用の曲である。そんな中でこれをオルガンで弾くということをやってみる。難しいのは、ピアノはペダルがあるのに、オルガンはないこと。ピアノは音域が広いが、それを弾くためにはオルガンでは二段の鍵盤で弾かなければならないこと。こういう曲でオルガンの良いところはストップを変えればいろんな音が出るところだけど、今回の演奏でそれを求めるのは残念なことに、困難を極める。これは時間的な制約もあって(笑)。

「プロムナード」は散歩という意味で、展覧会場で絵と絵の間をぶらぶらとしながらの印象を書いているような曲。全曲の中では4回「プロムナード」という部分があって(同じモチーフはもう一回後で現れているが) 前の絵を見て次の絵を見るまでの印象を書いている。だから前の曲の雰囲気や後の曲の雰囲気によって少しずつ雰囲気が違う。曲と曲の繋ぎの曲でもあるけれど、絵(を示した曲)と現実を繋げる役割もある。

「小さなひよこの踊り」は、《トリルビイ》というバレエの場面を描いた絵によるもので、ひよこが跳ね回ったり、ピヨピヨ鳴いているような感じのする曲である。

(文責 柴田)

J.S.バッハ:「クラヴィーア練習曲集第3巻」より

「われらの主キリスト、ヨルダンに来たり」

バッハの「クラヴィーア練習曲第3巻」は、中にはクラヴィーア曲とみなせるものもあるが、大部分がオルガン曲である。「クラヴィーア」とは、ここでは鍵盤楽器全体のことをあらわすのではないと言われる。また、曲の配列がプロテスタント・ミサの形式を踏むため、別名「ドイツ・オルガンミサ」とも呼ばれている。冒頭と末尾に変ホ長調の壮大なプレリュードとフーガ（BWV553）を置き、そのプレリュードとフーガとの間に21のオルガン・コラールと4つのデュエットが挟まれている。いずれも躍動感溢れ、完成度の高い曲集である。

21のオルガン・コラールは、『教理問答コラール集』として収められ、ルターの『教理問答書』の中心箇条にかかわるテーマと、ドイツ語ミサに用いられる「キリエ」「グローリア」のコラールから成る。1つのテーマにつき、ペダル付きの大コラールと手鍵盤のみの小コラールの2曲（BWV675-677のグローリアのみ3曲）が掲載されている。

「われらの主キリスト、ヨルダンに来たり」BWV684は、同名のコラールに基づいて作られたオルガン・コラールで、ペダル付きの大コラール。テーマは、キリストがヨルダン川に至ってヨハネにより洗礼を受けたという一節である。低音部が16分音符で絶えず流れ、脚鍵盤はゆったりと歩み、高音部は躍動感が溢れ、それぞれのパートに生命力が感じられる。これらの動きは、タイトルから察するに、おそらくヨルダン川、キリスト、天、といったものを象徴するのではないだろうか。

J.S.バッハ:「8つの小プレリュードとフーガ」より

プレリュードとフーガ イ短調

「8つの小プレリュードとフーガ」は、自筆譜が現存せず、その形式も他のバッハの曲とはやや趣を異にするため、バッハ作曲ではないとされている。あまり密度の高さは要求されず、基本的な動きと素朴な響きを味わえる、オルガン入門者にうってつけな曲である。

その中で、イ短調のプレリュードは動きの幅はそれほど広くないにしても、緩急の差でダイナミックさを感じさせ、続くフーガは素朴で味わい深い旋律を奏でる。小曲ながら、それぞれの特徴をシンプルに表現している、センスある名曲と言えよう。

（文責 平澤）

クロード・ドビュッシー：子供の領分

1905 年、ドビュッシーは前妻と離婚し、銀行家夫人だったエマと駆け落ち同然に再婚し、その年、一人娘のクロード・エマ（愛称 “ シュシュ ”）が誕生する。ドビュッシーは 43 歳にして初めて授かったこの子を溺愛した。この作品は、彼女に捧げられており、献辞にはこう書かれている。「かわいいシュシュに。お父さんはこんなものを書いてしまったんだよ。」なんだか微笑ましくて好きなのですが、しかし「ドビュッシー 駆け落ち」とで Google で検索すると 121 件のヒットがある（私は上のものの方がよほど有名だと思っていたのですが、これには驚きです）。ただ子供が大好きなお父さんとは言い切れない人生の難しさ！……なんのことでしょうね。話を戻しましょうか。誤解のないように言っておきますが、これはピアノ曲です。ただ、オルガンでやっても面白いと思う。フランスの近代の曲にはメシアンなんかの色彩の豊かな曲もあるし、私はフランスの曲は結構オルガンにも合うのではないかと考えています。

第2曲 象の子守：作曲者の娘シュシュが大事にしていた象のぬいぐるみを題材にしたといわれている曲。象ののっしりした感じと、子守の感じというのは言われればそうかな、と思う。ただ、そうも言っていられない。時々音がチョンチョンと飛ぶ。さて、何だろうこれは。

第1曲 グラドゥス・アド・パルナッスム博士：どうにも覚えられない変わった題名ですが、クレメンティの練習曲集のタイトルからとったものらしい。内容は退屈な練習曲を繰り返す弾く子供たちの姿をユーモラスに表現したとか何とかで、やっぱり変な曲。しかし、何だか魅力のある曲でもある。

（文責 柴田）

J.S.バッハ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調

バッハがヴァイオリンのみを独奏楽器とした協奏曲は6篇が知られ、うち3篇のオリジナルは現在失われて、チェンバロ協奏曲などから復元されるのみである。

このヴァイオリン協奏曲第1番はヴァイオリン協奏曲としてのオリジナルのまま現在まで伝わった3篇のうちの一つである。トゥッティとつなぎとを交互に置く形式を取り、これはおそらくヴィヴァルディから取り入れたものであろう。

第1楽章は緊密なトゥッティや、次々繰り返されるソロと副旋律によって、極めて華麗なものとなっている。また、第2楽章ではそれとは対照的に、穏やかな低音部の上で、伸びやかに旋律が歌い上げられる。そして、最後の第3楽章は

再びペースを上げて、トゥッティが躍動的にフーガを繰り広げる。

そもそもこの協奏曲、果たしてオルガンで伴奏して良いのか、非常に疑問ではある。また、調律が合っていないという根本的な問題もある。しかし、8 feet のストップを引いて伴奏した第2楽章の素朴な響きに魅せられて、また、「ものは試し」という人生哲学を以て、果断したのであった。

（文責 平澤）

ヴァルター：「イエスはわがよこび」の主題による変奏曲

ドイツの賛美歌の変奏曲。曲調の変化が美しい。重厚で、パイプオルガンの響きが似合うテーマと、それに続く単音のか細い旋律、低音がテーマになったり、3拍子になったりと、変化に飽きない見事な変曲である。10ある変奏曲のうち、いくつかを抜粋して演奏する。

（文責 鹿島）



~ Profile ~

Organ

鹿島 真人 Masato Kashima

オルガン同好会のサークル立ち上げの時に、その存在を「教養学部報」という誰も読んでいない学内誌で知り、以来オルガンを弾いている。実家にも、今住んでいる寮にもリードオルガンがあるという特異な環境の中で、わりとオルガンには親しく生きてきた。でも根気よく練習しないため、なかなか上達しない。

現在、文学部思想文科学科倫理学専修に所属する3年生であるが、文学部のカビ臭い空気に閉塞感を感じて、鞍替えを検討中。

柴田 康太郎 Koutaro Shibata

学内報で偶然オルガン同好会の存在知り、来てみたら、いたのが高校の同級生の平澤くん。世界は狭いものです。しかし私は現在教養学部文科三類2年生であります。。。

平澤 歩 Ayumu Hirasawa

このオルガン同好会の設立者、と言えば聞こえは良いが、その実は夜の900番講堂に集う不審集団のリーダーである。運営方針は、「てきとー」。このサークルが、およそ「組織」としての体裁をなしていないのは、まったくもってこのためである。

現在、文学部中国思想文化学専修過程に所属する3年生であるが、週に3,4回駒場キャンパスに出没する。なぜか？ それは駒場が楽しいからである。

Violin

江間 有沙 Arisa Ema

夜9時近く、もはや何のためにそんな遅くまで残っていたのかもわからない夜中の学校。てけてけと帰ろうとした私の耳に飛び込んできたのが、オルガンの音と怪しい笑い声。導かれるようにして900番の扉を開けた私を待っていたのは…。

ソナチネでピアノにさよならを言った私がなぜここにいるのかといえば、それは一言、おもしろいからです。駒場残留、教養学部広域科学科の3年です。

～ Epilogue ～

「ここらでいっちょ、演奏会でもやるべ」

「てきとー」な平澤氏の発言によって、この企画は動き始めました。五月下旬に 6 月 22 日にやろうと日にちだけは決定され、大した進展もないまま、「そういえば、演奏会ってやるの？」の言葉で慌しいながらも、ここに第 1 回オルガン同好会の演奏会を持つことができました。

母体集団は 900 番講堂で夜中にパイプオルガンに引き寄せられてくる人々。訪れ方も、経歴も、年齢も弾く曲も多種多様。今日はどんな人に会えるのだろう、どんな曲を聞けるのだろう、まさに「一期一会」の気持ちで毎回 900 番の分厚い扉を開けています。

今回は突然の第 1 回ということで、演奏者は少ないながらも曲目はバラエティに富んだ充実したものとなっています。パイプオルガンだから...という固定観念を打ち破り、日々新たな発見を見出すことが楽しいです。

「てきとー」には「てきとー」なりのよさがあります。不定期で不特定なメンバーですが、皆、オルガンが大好きです。900 番横を通りかかったとき、オルガンの音色と笑い声が聞こえてきたら、是非またお立ち寄りください。

それでは、次は「第 2 回オルガン演奏会（詳細未定）」でお会いしましょう！

プログラム製作 江間 有沙



